

コロナ社会で共に生きるために

No. 1

種を蒔く



世界仏教文化研究センター長
龍谷大学国際学部教授
久松英二

新型コロナ・ウィルスの感染拡大により、普段行っている行動が著しく制限され、いろいろな不自由を強いられています。学校に行けない不自由、友人や親族に会えない不自由、働くことができない不自由。いろんな意味でやりたいことができない不自由。私たちは、いま、それを経験しています。少しずつ、制限が緩和されてきてはいますが、コロナの第二波、第三波も懸念され、不安と焦燥感からなかなか解放されませんね。そこで、先のことをあれこれ心配することを、いまはひとまず脇に置いて、普段、あまり考えないことを考えて、気持ちをリフレッシュさせましょう。

いきなりですが、「縁起がいい」とか「縁起が悪い」とか、私たちはよく口にします。ここで言う「縁起」は吉凶の前兆という意味で使われていますが、この語は、本来は仏教用語でありまして、「因」（原因）だけではなく「縁」（条件・間接原因）によって物事が生じることを意味する「因縁生起」を縮めた言い方があります。種が発芽する場合、発芽の「因」は種です。しかし、この場合「因」のみでは発芽という「果」は生じません。発芽するためには、その種を蒔き、水を与え、日光に当てるといったさまざまな条件が必要です。その「さまざまな条

件」が「縁」です。物事は「因」のみならず「縁」によって生ずる。仏教はこの「縁」をととても重視しています。そして、もし、あなたが種を蒔くならば、あなたは種にとっての最初の「縁」となります。種を蒔くというあなたの「縁」があって、初めて発芽が可能になるのです。この「縁」を仏教はととても重視しているのです。

ところで、種を蒔くということで、私は、ふとある俳句を思い出しました。

種蒔いて 明日さへ知らず 遠きをや

医者の肩書を持つ俳人、水原秋櫻子の作です。「種蒔く」という春の季語が入った俳句はたくさんありますが、ほとんどの場合、その種が発芽し、やがて花咲き、実を結ぶことを心待ちにする明るく軽やかな雰囲気が漂っています。が、この句は真逆です。作者自身、この句を「生涯で一番辛かった頃の記念として」残したと述べているほどです。この句は昭和29年の作です。つまり、作者が空襲で東京の家を失い、八王子に仮寓していたときのものです。

作者はいま何かの種を蒔いている。明日という日がどうなるか分からぬという不安な時代に、ましてこれが開花するような遠い先のことなど、どうして期待することができようか。明日さへ知らず遠きをや。もうお先真っ暗、希望もへつたくれもないですね。

けれども、取りようによっては、これには「励まし」の句として響くものがあります。作者にその意識はなくとも。たしかに、あの時代は苦しみの時代だった。明るい希望などもてない時代だった。明日、生きているかどうかも知れぬというのに、この種が花咲き、実を結ぶ遠い将来を夢見る境地にどうしてなれようか。そういう気持ち、そういう閉塞感を作者がもっていたのは確かな事実です。

しかし、しかしそれにもかかわらず、作者は種を蒔いているのです。がたっと肩を落としつつも、茫然とため息をつきつつも、それでもとにかく、種を、いま、蒔いているのです。どうせムダだ、と種蒔きを放棄したわけではないのです。ここがポイントです。ここが大事なのです。

将来を嘆くのは仕方ない。状況がそうなのだから仕方ない。しかし、私の手のなかに「種」がある、という事実に目を開くこと。これが大事なのです。「種」、それはあなたとして花ひらく未来へのポテンシャル、とでも言いましょうか。そういう種は、じつは、だれにも、ある。「明日さへ知らず遠きをや」でも、ある。がくっと肩を落としつつも、とにかく、いま、蒔いてみる。これが大事なのです。なぜなら、「明日」の花、「遠き」実りは、私の思い、にではなく、蒔いた種のな

かに、しっかりあるからです。ただし、あなた自身が、種を蒔くという「縁」になってあげるならば、です。どんなにお先真っ暗であっても、どんなに可能性が低く思えても、あなたが「縁」になってあげれば、あなたが、いまやるべき学び、いまやるべき課題に真摯に取り組むという種蒔きを、こつこつと、たまにため息をつきながらも、たまにがっくり力を落とすことがあっても、焦らず慌てず諦めずに続けるならば、種は必ず、あなたに、美しい花を、豊かな「果」を、与えてくれます。必ず、です。

【著者紹介】

専門：東方キリスト教・宗教学

著訳書・論文等：『14 世紀ビザンツの静寂主義』（京都大学学術出版会）、『東方の智　ギリシア正教』（講談社）、『聖なるもの』（岩波文庫）その他